様式1

令和４年度　学校評価表

学校教育目標	自ら学び，考え，発信する子供の育成

a　ミッション	小中連携教育を核とした確かな学力定着の取組の充実と発展	a　ビジョン	○児童の主体性を育み，未来につながる学力をつける学校 ○幼・小・中の連携による学びの連続性を大切にする学校 ○家庭・地域とともに，子供の育ちを考える学校

尾道市立美木原小学校

評価計画						自己評価					学校関係者評価				改善計画
	b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月 g 達成値	1月 g 達成値	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価 イ	ロ	ハ	l コメント	m 改善案
学びを創る	「考える　伝え合う力」の育成	読解力の向上	①フレームリーディングによる「読むこと」の指導 ②思考ツールの活用	学期末テスト・活用テストの校内平均点（国語科思考・判断・表現の観点） （１２月）標準学力調査の平均通過率（国語科）	全国平均以上	85.8 （全国平均83.5）		103	A	国語科の読解力を見取る学期末テスト・活用テストの校内平均点は85.8と全国平均を上回った。 しかし，学年や児童による差が大きく，児童の実態やつまずきを正確に把握し，個に応じた適切な指導が必要である。 また，内容のまとまりを適切に捉え切れていないことも課題である。そのことにより，文章全体の内容を把握できないことや段落同士のつながりを捉えることができない要因となっている。さらに，問題の条件に合わせて自分の言葉で表現することができていないことも課題である。	3			・個人差のあることだと思うので、コツコツと文章や文字に取り組める力を高めていってほしい。すべての教科や全てのことにつながっていく力なので。 ・効果の出つつあるフレームリーディング等も期待しています。 ・学期末テスト、全国学力テストともに全国平均値を上回っていて、取組の成果だと思います。 ・立派です。平均点なので上回っている子、下回っている子、当然いるわけですが、４～１０月生まれ、１１～３月生まれで差が出ていることはないですか。	・これまでのテストや授業の様子から児童の実態を把握し，授業のユニバーサルデザイン化の工夫を取り入れながら，つまずきに合わせて授業展開や指導内容を修正・計画していく。 ・復習を中心とした家庭学習行い，直しをやり切らせて，つまずきに丁寧に対応していくとともに，家庭とも連携を図っていく。 ・物語文の学習では，時や場所、人物などに着目させて，大きなまとまりを捉えさせる。また，文脈や接続語を基にして，文や段落同士の関係を捉えさせ，まとまりの認識を高めていく。考えの根拠となっている部分が本文のどこに書かれているのか，叙述から根拠を示して説明させていく。
生活を創る	児童自らが学校生活を創る特別活動の充実	自己有用感の向上	①児童会とコラボレーションした委員会活動や名人表彰 ②縦割り班掃除での褒め褒めタイムの実施	自己有用感に関するアンケート （肯定的評価） ７月・１２月・２月実施	上半期８５% 下半期９０%	93.9		110	A	児童による「美木原アンケート」の結果，自己肯定感に関する項目では，肯定的評価をした児童が93.9%おり，目標の８５%を上回った。 上半期では，図書委員会のスタンプラリーや体育委員会のサーキット，児童会のあいさつ運動やぬりえコンテスト等を実施した。また，毎週金曜日の掃除後に行うほめほめタイムも定着してきた。 しかし，イベント活動を開催しても参加する児童に偏りが見られるものもあった。ほめほめタイムは，６年生が素敵なところを発表し，他学年は聞くだけになってしまっていたため，ほめほめタイムの実施方法を工夫する必要がある。	3			・どんな子にもスポットライトが当たる場面があればうれしいはず。 ・小さな学年でもどんどん声が出せる仲間（縦割りの）であれば楽しいでしょう。 ・家庭でもよいところは褒めるということを心掛けていきたいと思います。様々な場面で多数の児童が褒められ、認められる活動がとても良いと思います。 ・ほめほめタイムに関して、自分から一日のうち何か一つよいことをする運動をしてはどうか？一日一善運動として。 ・投書箱を設置して自分は何々をしたと学校全体で取り組めばより美しい学校になるのでは。 ・いろいろ工夫されているようです。 ・目標を上回ったのは立派。いろんな活動が年を重ねることにより定着しているが、一部の児童に偏りとか聞くだけになっているのは児童側にやらされ感があるのではないか。	・どんなイベントがしたいのか意見を言える場を設定し，５・６年生だけが考えたイベントではなく，下学年の意見も取り入れられるようにする。 ・ほめほめタイムは，６年生からのほめほめだけではなく，他の学年も異学年の素敵なところを見つけて発表し合える場へとレベルアップしていく。
働き方改革	豊かな教育活動の実践	よりよい働き方による勤務時間外在校等時間の減少	①セルフタイムマネジメントによる働き方（月１回以上） ②教職員間の連携 ・業務の見通し・児童の実態・取組	勤務時間外在校等時間の平均	４０時間以下 ９０%	91		101	A	勤務時間外在校等時間の平均が４０時間以下を達成できた教員が９１%であった。個々が入退校時間を月毎に確認し，時間を意識して働くことができた。 また，毎月の分掌部会後に教職員間の連携を図る時間を設定し，児童の様子や変容，授業実践について交流することで取組の共有や見通しを確認することができた。 しかし，方策については目標を達成できたが，業務が多い月（４・６月）は４０時間以上となる教員が多かったことや同時期に仕事の負担が重なる教員がいただめ，業務内容や分掌内での役割分担を改善していくことに課題がある。	3			・声を掛け合ったり、横の連携を取りながら、良い空気間で指導の方よろしくお願いします。 ・先生方が元気で生き生きと働けることが子供たちの生き生きと活動する姿につながると思います。 ・４０時間の残業が決して少ないとは思わない。一年間の上限が必要なのではないか。また、ノー残業の日の設定をしてもよいのでは。 ・先生方の家庭や健康管理を大切にして、子供達が先生という職業にあこがれるように！ ・時短に努めてください。	・分掌部会後の職員間の交流を継続し，交流したことを全体で共有しながら連携を図っていく。 ・放課後の業務について，低中学年ブロックや各分掌部会で仕事の優先順位について声をかけ合い，仕事の見通しを持つ。 ・勤務時間外在校等時間を短縮することを目標にするだけでなく，業務内容や行事等のカリキュラム・マネジメントを行い，見直し改善をする。

【自己評価　評価】
Ａ：１００≦（目標達成）　Ｂ：８０≦（ほぼ達成）＜１００
Ｃ：６０≦（もう少し）＜８０　Ｄ：（できていない）＜６０

【外部評価】　イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。　ハ：わからない。